

2009 年度子どもゆめ基金助成事業

第 6 回川と山のぎふ自然体験活動の集い 報告書

2009 年 11 月 7 日(土)・3 日(日) 於 下呂市 岐阜県立御嶽少年自然の家

子どもゆめ基金
2009年度子ども夢基金助成事業

11月7日・8日
土曜日 日曜日

第6回
川と山のぎふ
自然体験活動の集い
参加料 1,000円

～山・森・水・人～
にぎひ ぎふ
御嶽・濁河温泉に地域力集合
岐阜県立 御嶽少年自然の家 (下呂市小坂町)
< 11月7日土曜日 午後1時 開会 >

目 次

実施要項	3-8
実施記録	9-22
新聞記事	23
アンケート結果	24-26
総括にかえて	27



募 集 要 項

2009 年度子どもゆめ基金助成事業

2009 年度 第6回川と山のぎふ自然体験活動の集い 募集要項

ご挨拶

2005 年 3 月に県内の自然体験活動を行なう団体や指導者が県立森林文化アカデミーに集合して始まったこの『川と山のぎふ自然体験活動の集い』も今年で6回目を迎えました。美濃、飛騨、郡上、西濃、東濃と場所を変え地域の自然体験活動をふまえた集いを展開してきましたが、今回は南飛騨御嶽山麓で開催のはこびになりました。

御嶽山は歴史ある信仰の山であり、その広大な山ろくは豊かな自然と文化を有しています。今回、御嶽少年自然の家でこの地域の密接に関わるテーマで自然体験活動に携わる多くの方々と自然体験活動の現状の課題と今後の方向について語り合っ生きていきたいと考えています。

現在、子どもの自然体験の重要性が叫ばれ、文部科学省の『子ども長期自然体験プロジェクト』 始まろうとしている中、その一方で県下の少年自然の家の廃止が検討されています。

「COP10」が名古屋で開催される中、多様な自然を再認識し、自然体験活動をとおして地域の自然資産を地域の活性化につなげていくことが求められています。自然体験活動に携わる多くの方々の参加と交流をとおして、子どもたちや地域の人たちの自然体験活動が一層充実したものになりたいと願ってやみません。

テーマ “～山・森・水・人～御嶽・濁河温泉に地域力集合”

主催 川と山のぎふ自然体験活動の集い実行委員会

後援 岐阜県(予定)、下呂市教育委員会(予定)
特定非営利活動法人自然体験活動推進協議会

日時 2009年11月7日(土)～11月8日(日)

場所 「岐阜県立御嶽少年自然の家」 岐阜県下呂市小坂町落合 2376-1(濁河温泉地内・御嶽山六合目)
*カーナビではアクセスが表示されないことがあるのでご注意ください。(麓の間違った位置を表示)

参加料 1,000 円(保険料、資料代) その他に実費(昼食577円、夕食787円、宿泊料740円、シーツ代168円、朝食472円、)をいただきます
夜の交流会は参加費(つまみ代)500円をいただきます(希望者のみ)。飲み物は各自用意してください(自然の家にはビールの自販機はあります)。

日程 別紙日程表参照ください。

持ち物 上履き・防寒具・マイカップ・タオル・歯ブラシ他洗面用具一式・筆記具

その他 前泊が必要な方はお申し出ください。対応可能です。

ポスター等の展示セッション・団体活動紹介の場を設けます。ふるってご出展ください。出展希望の方は参加申込書にその旨ご記入下さい。

川と山のぎふ自然体験活動の集い実行委員会(アイウエオ順)

川尻 秀樹(森林インストラクター岐阜)
北川 健司(特定非営利活動法人エヌエスネット)
熊崎 浩之(岐阜野尻湖友の会)
柴田 甫彦(環境市民ネットワークぎふ)
田村 明(朝日大学)
佃 正壽(森林たくみ塾)
中澤 朋代(松本大学)
三島 真(山と川の学校)
八尾 哲史(岐阜県立森林文化アカデミー)

事務局

〒500-8141 岐阜市月丘町5丁目13番地

特定非営利活動法人エヌエスネット内

担当 高屋 良平

E-mail ryo@odss.co.jp

Tel 058-249-1166 Fax 058-248-4722

事業内容

第1日目(11月7日)

◎ エクスカーション 9:00~12:00

	概要	担当
岐阜の宝もの「飛騨小坂の滝」を巡る ★ 集合時間 9:00 ★ 集合場所 巖立公園駐車場 ★ 参加料 1,000 円 ★ 講師 桂川 淳平(NPO法人飛騨小坂 200 滝 代表)	下呂市小坂町には高さ 5m以上の滝が 200 以上あります。地元でNPOを立ち上げ、その滝を巡るコースを何箇所か作り、ガイドを始めました。今回は、そのうち初級コースを巡ります。 * 服装:谷間で日が当たらないので暖かいものを * 時間的には御嶽自然の家の昼食に間に合います。 * 駐車場にとめる場合は、駐車協力金 100 円が必要になります。	加藤 裕章(熊崎 浩之)
下呂石で石器づくり ★ 集合時間 9:00 ★ 集合場所 縄文公園駐車場 ★ 参加料 500 円 ★ 講師 小池 秀雄(下呂石シンポジウム実行委員会 代表)	下呂石は、湯ヶ峰火山の活動で出来た火成岩です。旧石器時代から石器の材料として使用され、その石器は長野県など県外からも出土されています。下呂石を石材として石器作りを体験します。 * 持ち物:軍手、タオル、ゴーグル(貸し出しあり) * 御嶽自然の家の昼食には間に合わないので、弁当持参が望ましい。	熊崎 浩之
日和田のキノコ狩り ★ 集合時間 9:00 ★ 集合場所 名鉄日和田高原ロッジ前 ★ 参加料 2,500 円 ★ 講師 牛丸 仁(日和田高原ロッジ支配人)	秋深まる日和田高原でキノコガイドとともに森に入り、キノコを探します。ガイドの解説をもらい安全なキノコの収穫と知識を深める時間を過ごします。終了後、ロッジにてキノコ料理のランチを楽しみます。参加費には、キノコランチ代も含まれます。 * 持ち物:森を歩きやすい服装、靴 * 採ったキノコは持ち帰れます。	北川 健司

● 受付 12:00~

◎ 開会式 13:00~13:30

研修室

進行:田村 明(朝日大学ビジネス企画学科教授)

基調講演 13:30~14:30 『落語家から学ぶインタープリテーション』 尾藤 政勇(民宿赤かぶ)

概要

「落語家から学ぶインタープリテーション」尾藤政勇(民宿赤かぶ)多くの寄席を企画運営されている尾藤さんに落語家の取扱い方から落語家から学ぶ噺のつかみ、間、話術など楽しいお話をいただきます。

時間内の収まらない尾藤さんの魅力はこの後の分科会で引き続き体験ください。

◎ 分科会1 14:30～17:00

1. もっと聴きたい落語家のウラ噺

概要	基調講演では、伝えきれないウラ噺と芸名を持っている尾藤さんの紙切りの技を体験会で教授いただけます。もっと聴きたい尾藤さんのウラ噺も楽しみです。
講師	可多家小里笑(赤かぶ企画代表 尾藤 政勇)
担当	平工 顕太郎 (アウトドア・サポート・システム エコ事業部)

2. 御嶽の原生林を歩こう

概要	濁河温泉周辺の亜高山帯針葉樹林、御嶽原生林を歩きます。ヒノキなどの天然林の森(1時間コース)を2時間半かけて小野木先生のトークとともにゆっくりと楽しみます。
講師	小野木 三郎(日本自然保護協会前参与)
担当	庄司 正昭 (アウトドア・サポート・システム エコ事業部)

3. 御嶽五の池小屋から

概要	五の池小屋は、旧小坂町が全面改修してから今年で10周年を迎えました。当初から小屋番を勤めている市川さんが、御嶽山の魅力、山小屋での体験などを写真を交えて語ります。なお、市川さんは、今春、「NHKアマチュアビデオ大賞」の奨励賞を受賞されました。
講師	市川 典司(五の池小屋小屋番)
担当	熊崎 浩之(岐阜野尻湖友の会)

4. もっと知りたいガイドツアー

概要	岐阜県内でも各所で盛んに行われてきているガイドツアーで実際にガイドしている方々に集まっただき、現状や今後について意見交換する時間を持ちました。
ゲスト	三宅 信(トヨタ白川郷自然学校)、影山 節子(飛騨市・白川郷自然案内人協会 天生湿原)、 中屋 妙子(ネイチャーグレース・うたてい)、桂川 淳平(飛騨小坂200滝)
進行	田村 明(朝日大学ビジネス企画学科)

5. 木育の実践例

会場: 工作室

概要	現在「木育」の重要性が叫ばれています。現在、それぞれの立場から「木育」に関わっておられる方をお招きし、その取り組みと意思をお話していただきます。後半は、参加者に取り組みの一端を木工実習という形で体験していただきます。 <木工体験>①音のなる木のおもちゃ ②鼻笛 ③小枝の笛づくり ④箸づくり * 定員: 各木工コーナー5名 * 参加費: 実費(教材費)①450円 ②未定 ③無料 ④未定
講師	① 入江 鐵夫(行灯工房代表) ② 栗谷本 征二(栗くり工房代表) ③ 小木曾 賢一(森林たくみ塾) ④ 酒井 寛(酒井産業社長)
担当	高屋 良平 (エヌエスネット)

6. 飛騨インタープリターアカデミーの成功例

概要	飛騨の自然案内人として自然・文化の解説者として多くの人材を育成してきた活動を紹介していただき、人材育成について考えます。
講師	今井 正人(飛騨インタープリター協会)
担当	北川 健司 (エヌエスネット)

◎ 団体紹介 19:00~20:00

●体験活動ぎふポータルサイト登録コーナー:いよいよ制作の始まった「体験活動ぎふポータル」の登録コーナーを会場内に設けました。インターネットを通じて、さらに繋がる岐阜県の体験活動のあなたも登録・参加してください。

◎ 交流会 20:00~22:00

第2日目(11月8日)

◎ 分科会2 9:00~12:00

1. 面白い地学・火山灰観察

会場: 工作室

概要	「川と山」に地学の分野が初登場！火山灰観察って？実は、子どもも思わず夢中になれる楽しいものです。火山灰は、意外に身近なところにもありますよ。例えば、各務原台地の下には、御嶽山から流れ出た火山灰が堆積しています。 * 持ち物:お椀(火山灰を入れて洗います)、ルーペ(あれば) * 定員:15名
講師	熊崎 浩之(岐阜野尻湖友の会)

2. 岐阜の自然体験施設について考える

概要	“時代に添っているのか、はたまた逆行か？ 今、県立の宿泊施設が岐阜から消えようとしている！ 岐阜の自然体験に与える影響は？ 今、私たち自然体験の実施者にできることとは・・・！？”
進行	千葉 篤志(郡上・田舎の学校事務局)

3. 秋神温泉小林さんと森を歩こう

概要	御嶽の歴史や原生林に生きる生き物たちの神秘さや、生きる力を感じ身も心も癒されましょう。
講師	小林 繁(秋神温泉旅館)
担当	庄司 正昭 (アウトドア・サポート・システム エコ事業部)

4. 御嶽から山問題を考える

概要	岐阜森林管理署のある小坂町でつどう今回の催しらしい分科会をということで企画しました。広く木の国山の国岐阜県の森について語り合う時間を共有しましょう。
ゲスト	高橋(森林づくりサポートセンター)
進行	伊藤栄一(森のなりわい研究所)

5. ツリークライミング体験

会場:日和田高原

概要	<p>ツリークライミングは専用のロープなどを使って、木に登り、木や森、自然との一体感を味わう体験活動です。「樹上から」という今までとは違う視点で森を見たり、五感を使い樹上の自然を体感すると新しい発見があるかも。</p> <p>今回は、単なる体験だけでなく、設営から撤収までの見学を含めて行います。</p> <p>* 持ち物:軍手 * 定員:10人程度 * 保険料を別途、負担いただきます。</p>
講師	上田 康美(ツリークライミングクラブ 代表)
担当	加藤 裕章 (アウトドア・サポート・システム エコ事業部)

◎ **全体会** 13:00~15:00 研修室 司会:田村 明(朝日大学ビジネス企画学科教授)

2日間の集いの成果を、分科会のコーディネーターやアクティビティ担当の方々からの報告を中心に参加者全員でわかちあい、今後の方向を確認する場にします。

- ・エクスカーショレポート
- ・分科会報告
- ・まとめ

日程表

日付	時間							備考
第1日目	9:00	エクスカーション ①岐阜の宝もの「飛騨小坂の滝」を巡る ②下呂石で石器づくり ③日和田のきのこ狩り						集合場所 ①巖立公園 ②縄文公園 ③日和田ロッジ
	12:00	受付(御嶽少年自然の家)						
	13:00	開会式・オリエンテーション						研修室
	13:30 ～ 14:30	基調講演『落語家から学ぶインタープリテーション』 尾藤 政勇(赤かぶ企画代表)						研修室
	14:30	1. もっと 聴きたい 落語家の ウラ噺	2. 御嶽 の原生林 を歩こう	3. 御嶽五 の池小屋 から	4. もっと 知りたい ガイドツア ー	5. 木育 の実践例	6. 飛騨イ ンタープリ ターアカデ ミーの成功 例	
	16:00							
	17:00	入浴						
	18:00	夕食						
	19:00	団体の活動紹介						研修室
	20:00	交流会						
	21:00							
第2日目	7:00	朝食						
	8:00							
	9:00	1. 面白 い地学・火 山灰観察	2. 岐阜の 自然体験施 設について 考える	3. 秋神温泉小 林さんと森を歩 こう	4. 御嶽から 山問題を考 える	5. ツリーク ライミング体 験		
	10:00							
	11:00							
	12:00	昼食						
	13:00	全体会 ・エクスカーンションレポート						研修室
	14:00	・分科会報告 ・まとめ 閉会式						
15:00	解散							

実施記録

■エクスカージョン

★岐阜の宝もの「飛騨小坂の滝」を巡る

ガイド: 桂川 淳平(NPO 法人飛騨小坂 200 滝代表)

参加者: 14 名

担当: 加藤裕章(ODSS エコツーリズム事業部)



《報告》

「NPO 法人飛騨小坂 200 滝」代表の桂川さんに「小坂の滝」を案内していただきました。下呂市小坂町には高さ 5m 以上の滝が 200 以上もあり、地元で「NPO 法人飛騨小坂 200 滝」を立ち上げて、滝を巡るコースをつかれたそうで、今回はそのうちの初級コースを歩きました。

集合場所のがんだて公園では、54,000 年前の大噴火によってできた高さ 72m、幅 120m の柱状節理の大岩壁を眺めました。どかーんとスケールの大きな大岩壁に圧倒される思いがしました。ここを出発し、整備された遊歩道を歩きはじめて間もなく、沢を覗くと大きなアマゴが数匹泳いでいました。ちょうど今が産卵の時期のようです。

最初にあらわれた滝は「三ツ滝」。マイナススイオンの数は 15,500 個、午前 10 時ころまでが最も多そうです。左方には柱状節理の岩壁を間近に眺め、眼下には滝を眺めながら歩いて行きました。

林道に出ると、見えないガードレールがありました。線路を再利用して造られたそうで、昭和 35 年頃までは森林鉄道が走っていたそうです。しばらく林道歩きが続き、「あかがねとよ」、「からたに滝」、15m ほどの 2 本の滝を巡りました。

参加者は健脚の方が多かったので、帰り道は、一般のお客さんは案内しないルート案内していただきました。伐採した木を濁河川まで急斜面を運び出したという当時の苦労話をうかがいました。

また、御嶽山の形をしたかわいらしい岩がありました。御嶽山を開いた覚明行者が登山者をこの岩まで案内して、登山者を見送ったといういわれがあるそうです。

参加者の方の一人が「ここは溶岩の中を歩いているようだった」という表現をされましたが、まさに御嶽山から流れる溶岩の岩壁やその間をぬって流れ落ちる滝を間近に感じられ、人の暮らした歴史の名残も感じられる滝めぐりとなりました。

★下呂石で石器づくり

講師: 小池 秀雄(下呂石シンポジウム実行委員会代表)

場所: 下呂縄文公園

参加者: 5 名

担当者: 熊崎 浩之(岐阜野尻湖友の会)

報告者: 石際 淳(エヌエスネット)



《 報 告 》

9時に縄文公園に集合した参加者は8名。講師の小池秀雄氏は、近くに工房もお持ちで、下呂石で円空仏などの作品を作られたり、石器作り体験などを指導されてる方です。下呂石は、湯ヶ峰火山の活動で出来た火成岩です。旧石器時代から石器の材料として使用され、その石器は長野県など県外からも出土されています。小池さんは、子どもの頃、近所の畑からよくやじりなどの石器を見つけ、集めているうちに下呂石に興味を持たれたのだそうです。

まずは下呂石の説明をしていただきました。黒い普通の石に見えますが、硬い石やハンマーで掻き取るように叩くと薄くスプーンで削ぎ取ったように簡単に割れます。石片はそのままで十分ナイフに使えるほど鋭利です。薄い部分は割と簡単に割れる性質があり、石器時代には尖った鹿の角で加工していたらしい。

次に、縄文公園の芝生広場で実際に石器を作ってみました。使うのは、丸木の工作台と鹿の角の代わりに斜めにカットした太い銅線を木製の柄に刺した工具のみ。先生の模範実技を見せていただいてから、あらかじめ加工しやすいように小さく割ってある石片をもらい、参加者はそれぞれやじり作りに取り組みました。先生のやっているのを見ると、簡単にぽきぽき割っていけるように見えます。しかし、実際にやってみると、いくら力を入れても思うような形にならなかったり、せつかく形のできた部分が折れてしまうなど参加者は悪戦苦闘しているようでした。

下呂石の破片はガラスとまでは行きませんがかなり鋭利で、道具が滑るので軍手を外していたら、指などに刺さり流血しながらの作業になりました。作業場所にあらかじめブルーシートを敷いていた意味がわかりました。芝生などに散って後でその上に手をついたりすると、思わぬ怪我に繋がる危険があるようです。

次第にコツがつかめてくると少しの力で石を削っていくことができるようになり、気がつくと夢中になってあっという間に終了予定の11時になっていました。

小池先生から、もし体験活動で材料の下呂石が必要であれば、作品の製作過程で出た石片があるので、お分けしますとのことでした。ただし、削り屑を変なところに捨てて、何かの発掘調査で出てきてしまったりすると大変な騒ぎになりかねないので、できれば下呂まで捨てに来てほしいと言ってみえました。真顔で言われたので冗談ではないと思います。

地味なプログラムかと思いましたが、やってみると非常に面白い石器作り体験でした。

★日和田のキノコ狩り

場 所: 日和田高原の森

講 師: 牛丸 仁(日和田高原ロッジ支配人)

参加者: 6名

報告者: 高津 法子

《 報 告 》

好天の秋空の下明るい落葉広葉樹の森は気持ちよく、存分にキノコ狩りと楽しむことができました。

最初は森の中の小道を歩いてキノコを探していましたが、そのうちに各自思い思いに森の中に散って行きました。講師の牛丸さんから教えられたキノコの出やすい場所を探しまわって実際キノコを見つけるとうれしさのあまり舞い上がってしまいました。マイタケは見つけることはできませんでしたが、クリタケや、ムキタケなどおいしいキノコがいっぱいとれました。

キノコ狩りの後は試食会。てんぷら、お吸い物、鉄板焼きとキノコ料理づくし。秋の森の幸をおいしく頂きました。もちろん、豊富なキノコが豊かの森の幸であることもしっかり学びました。

★ 開 会 式

進行: 田村 明(朝日大学ビジネス企画学科教授)
場 所: 研修室

- 実行委員会長の挨拶 北川 健司(NPO 法人エヌエスネット)
県内の自然体験活動を行う団体や指導者が県立森林文化アカデミーに集合して始まった「川と山のぎふ自然体験活動の集い」も今年で6回目。美濃、飛騨、郡上、西濃、東濃での岐阜県内を一周して今回は、御岳の麓、岐阜県立御岳少年の家での開催です。各地域で意欲的に取り組まれている方の交流の場として開催してきましたが、設方の交流が進み、協働も多くされてきました。



今回の会場である御岳少年自然の家など岐阜県立の施設は、今年度で全てが閉鎖される予定で、自然体験活動が進み、文部科学書も体験活動を学校教育の中で1週間程度の宿泊型で4年後からの実施を目指している中で、その逆行するような岐阜県の政策にたいへん疑問を感じます。

たいへん山深い場所に、足を運んでいただきありがとうございます。午前中のエクスカージョンです。交流の進んでいる方もありますが、今回も集い語り合い繋がる2日間で存分に交流いただきたいところです。ここで学んだことや交流の進んだ結果を、みなさんの活動地域の子ども達、地域の人たちの自然体験活動に生かしていただきたいと思えます。

- 受け入れ施設のオリエンテーション 御嶽少年自然の家職員
プロジェクターを使った、自然の家の紹介と施設の案内
- 事務局からのインフォメーション 高屋 良平(NPO 法人エヌエスネット)

★ 基 調 講 演

テーマ:『落語家から学ぶインタープリテーション』
赤かぶ企画代表 尾藤 政勇



講演は2階のステージに高座をしつらえるところから始まりました。出囃子で高座登られた尾藤さんはインタープリテーションにつながる落語のあり方、噺家のスタイルについて語られました。落語は舞台を設定するうえで、会場の大きさ、客との距離、照明、ステージの高さ等、客をしっかりとつかむための条件が備わっている必要がある、つまり、噺が始まる前からすでに勝負は始まっているということを示されました。これはインタープリテーションでいう「しかけ」です。紙切りをやりながらの客とのやり取り。紙切りの技で客を「つかみ」、それをきっかけに客とのコミュニケーションを展開していく、これもそのままインタープリテーションにつながるものです。「人を惹きつける力」、「話術」、「間の取り方」、「落ち」など噺家の芸はまさにガイドやインタープリターが客や参加者に接し、語りかける際に求められるスキルです。“笑い”によって人を惹きつける技を紙切り芸のなかで示しながら、自然体験の指導者や指導者を目指す人たちに人と人との距離を縮めるポイントを教えていただきました。

第1日目 分科会

1. もっと聴きたい落語家のウラ噺と紙切り体験

講師: 可多家小里笑(かたやこりしょう)

= 赤かぶ企画代表 尾藤 政勇

参加者: 7名

報告者: 平工 顕太郎(ODSS エコツーリズム事業部)



《 報告 》

落語の世界において、名が売れるか売れないかは必ずしも落語家の腕の善し悪しだけではないそうです。

- 例1) ビデオテープのなかった時代は、決められた規格のカセットテープに落語を綺麗に収められた人が売れた(全国にテープが販売されることで名が売れていった)
- 例2) 同じネタを何度やっても5秒とずれない人が売れた(綿密に時間を管理する主催者側にとっては使いやすい → 寄席に呼んでもらえる)
- 例3) 林家三平さん: 小話の連続だから柔軟な対応が可能 → 主催者としては時間の調整がやりやすい

上記の例は落語のみならず、この地域(益田)の資源(鮎)を活かした催し物にも当てはめることができるそうです。

馬瀬の鮎といえば日本一の鮎との評判もあるほどで、全国から大勢の人が押し寄せます。一方で、鮎釣り大会に関してはお隣の益田川での開催が多く見受けられます。それはおそらく主催者や運営者、選手、ギャラリー、女性客など大会に関わる多くの人にとって都合が良いからではないでしょうか(アクセス、駐車場、川幅、容量、セレモニー会場、機材、電源、トイレなど)。これらは私たちが提供する自然体験活動と照らし合わせても言えることで、私たちが個人で自然の中に入る際には要求されないようなことでも主催者側として団体、お客さんを迎え入れる場合にはこれら多くの配慮が必要となるわけであります。

しかし正直な気持ちとして、やはりより多くの人たちに自然との接点を持っていただきたいと私たちは思うのであり、くだらない話が得意な、そして人を惹きつけるのが得意な噺家・林家三平さんのように、老若男女多くの人々に対して新しい世界への入口を開いてあげられるような存在の重要性というのは、落語界も私たちも同じであることを改めて認識させられた時間でありました。

その後は尾藤さんのご指導のもと、参加者全員で紙切り体験を行いました。始めは本当に大人が切ったのかと思わせるような、とても人様にはお見せできない仕上がりのものばかりが生み出されていきましたが、何度も失敗を繰り返すうちに徐々に上手に仕上がっていくのが私たちの目にもわかり、イメージしながら切ることの大切さを実感しました。そして「器用か不器用かは手先ではなく目が問題。目を鍛えることが重要」という尾藤さんのお言葉が強く印象に残りました。紙切りでは主に右脳を使うため、右利きの人はやわらかいハサミを使用したほうが良いことや、ハサミの選び方など、尾藤さんの紙切りに対するそのこだわりにはプロの意識を感じさせられました。その他にも、子どもを対象とした紙切り体験での適正な人数や、親子参加の場合の注意点や苦労話なども笑いを交えながら楽しく聞かせていただき、とても笑う機会が多い分科会となりました。

2. 御嶽の原生林を歩こう

講師:小野木 三郎(日本自然保護協会前参与)

参加者:14名

報告者:石際 淳(エヌエスネット)



《報告》

まずは屋内で座学。気温(標高)と降水量で変化する世界的な植生のカテゴリーのなかでこれから歩く御嶽濁河温泉付近の植生がどのような位置づけになるのかを学びました。

濁河温泉のあたりは常緑針葉樹林(亜寒帯)で「スイスを歩くようなもん」。外国の常緑針葉樹林帯は樹種が1種類のことが多いのですが、この辺りの針葉樹の種類は8種類と多い。ヨーロッパ、カナダの常緑針葉樹林帯は氷河のため一たん死滅した植生が回復した原生林なので樹種が少ないのだそうです。岐阜県は照葉樹林帯(暖温帯)からツンドラ(寒帯)までの植生が観察できる素晴らしいフィールドというお話でした。

少年自然の家を出発し原生林探索コースに入って、まずは針葉樹が何種類あるかを尋ねられました。大木から、芽生えたばかりのチビまで、主に樹皮や葉っぱの違いで数を増やしていきます。小野木先生からは特に種名や見分け方の詳しい説明はありません。誰でも見ただけで違いがあるのは分かるのですが、どこが違うかを言葉で表現するよう指導されました。その場その場で観察される植物に関する面白いお話を聞きながらゆっくり歩きます。研修室ではすごく声が大きい先生だなと思いましたが、フィールドに出るとちょうどいい。小里笑さんのお話にもあったように、参加者の注意を絶えず引き付ける話術は勉強になりました。

「皆さんもここで痺れを切らしと思うので、見分け方を説明します。」と参加者に配られたのが、最も権威があると言われる「牧野新日本植物図鑑」をコピーした資料でした。写真の図鑑に慣れた者にとっては、線描のイラストだけでは現物のイメージがわからないし、特徴を記述した解説文の分量が多すぎてどこがポイントなのかよく分かりませんでした。参加者の皆さんもペーパーを手に持って戸惑っている様子。そこで小野木先生が葉に関する記述に注目するように言われました。「シラビソは「葉は…枝上に2列に並ぶ」、オオシラビソは「葉は密に互生し」となっている。この意味を考えると、シラビソは軸が見え、オオシラビソは軸が見えないというこっちゃ。」実物をその観点で観察すると、さっきまで同じように見えていた2つの樹の枝がまったく違うのが分かりました。最初から、どこが違うかを言葉で表現するよう指導されていたのも、ここに繋げるための練習だったのだと思いました。この辺りで観察できた針葉樹は、シラビソ、オオシラビソ、トウヒ、コメツガ、チョウセンゴヨウ、ヒメコマツ、イチイでした。

3. 御嶽五の池小屋から

講師:市川 典司(御嶽五の池小屋小屋番)

担当者:熊崎 浩之(岐阜野尻湖友の会)

参加者:4名

報告者:高津 法子

市川さんが撮り続けている、そこにある風景が鮮やかに映し込まれた写真をスライドで見ながら、御嶽山の魅力、天上の山小屋についてのお話を聞かせて頂きました。

会場となった部屋から間近に見える御嶽山を皆で望み、「あそこに見えるのは剣が峰、摩利支天山…、その間に見えるのが五の池小屋です。」と市川さんのお話が始まりました。スライドを説明する市川さんの目をきらきらさせた語りには五の池小屋での日々を生き生きと過ごし、楽しんでいる様がよく伝わってきました。小屋開きや小屋内お掃除話も交えて、自家製の魚の燻製、味噌作り、高山植物保護のためのパトロール、スタッフ風景なども飛び出しました。参加者には、山小屋で生きること、働くこと、に関心がある人、御嶽山の自然をフィールドとしている人などが集まり、小屋に長逗留するお客さんはいますか、などの質問がアウトホームの雰囲気の中、出てきました。風、風雪は大変強く、ご来光、夕日のどちらも望める立地で雲海もまた格別。静かな山と花に触れたかったら7月中旬頃が良いですよ、と市川さん本人お勧めの天上の世界をゆっくり味わえるベストシーズンも教えて頂きました。

・自己紹介

もともと下呂市の建物だった小屋が台風の被害を受け、2000年に改修が行われる。それに際し、小屋番の公募があり市川さんは10年以上携わることになる。

20代はオートバイで日本一周をしていたが、それに飽きを感じ、山に興味を持ち始める。富山県の高山植物の花が広がる所で小屋番を約3年間、その後御嶽山のスキー場などで働き始める。

・御嶽山の自然

御嶽山は四つの峰と五つの池から成り、裾野が広く、スケールの大きさを感じられ、ひと固まりの山脈としての巨大さがある。

高山植物の花は岐阜県側の登山道に長野県側より多く見られる。チングルマ、ハクサンチドリ、クロユリ、キバナシャクナゲなど、また、高山植物の女王と言われる“コマクサ”にあった土壌らしく、先代の小屋番が植え付け始めたものが現在に至り、コマクサの群生が見られる。イワヒバリや、ガス出てきて天気が下り坂になると鳴き始めると言われる雷鳥は100羽近く生息している。

・小屋、その周辺の魅力

小屋の眼前にある五の池では6月下旬から7月頭に流水が見られ、小屋から徒歩30分圏には標高2000mを流れる川や高山植物の宝庫の四の池、御嶽山の御神水でもある三の池がある。二の池はいつでも変わらないコバルトブルーの色を湛えている。

4. もっと知りたいガイドツアー

ゲスト:三宅 信(トヨタ白川郷自然学校)、影山 節子(白川郷自然案内人協会 天生湿原)、
中屋 妙子(NPO 法人ネイチャーグレース・うたてい)、桂川 b淳平(NPO 法人飛驒小坂 200 滝)
進行:田村 明(朝日大学ビジネス企画学科)
参加者:8名
報告者:加藤 裕章(ODSS エコツーリズム事業部)



《報告》

各団体から活動の現状と課題について紹介がありました。

○トヨタ白川郷自然学校

- ・キーワードは自然・過去・未来との「共生」。
- ・来客者はホテルのような感覚で来られるが、一步外に出ると森。服装、持ち物などを代表者には伝えるが、参加者全員には伝わらないことがある。
- ・蜂や熊などの安全確保が問題。
- ・人材育成のカリキュラムは過去から引き継いだものをベースに行っているが、それ以上のものが定まっておらず、現在手探り状態。

○白川郷自然案内人協会

- ・公認ガイドが企画から進行まで全てを運営している。
- ・入山者数は平成 16 年以降増加傾向にある。
- ・入山者は 6 月と 10 月に集中し、人が連なり渋滞になることがあるが、いかに楽しんでいただくかが課題。

○NPO 法人飛驒小坂 200 滝

- ・初級コースはだれでも入れるが、中級以上のコースはガイドつきでないと入れない。
- ・国有林のため入山届が必要であり、その都度入山届を行うのが煩雑。
- ・下呂温泉と連携して行っており、温泉の宿泊客が多い。

○NPO 法人ネイチャーグレース・うたてい(五色ヶ原)

- ・高山市に合併してから外向けに広報をしなくなった。入山者数は減少傾向。
- ・NPO は収入が少ないわりに忙しい。
- ・うたていの活動は、自分たちがとことん自然の中で楽しみ、お客さんを巻き込んでいる。人は人に感動し、伝染する。

その後、テーブルを囲んで、田村さんの進行によりガイドツアーの課題についてディスカッションしました。

●今後の課題

- ・観光産業として成り立っていないので、ビジネスとして成り立っていく方法を考えていかないといけない。
- ・五色ヶ原は値段が高く、時間も長い。お客さん目線で調査するといいい。
- ・五色ヶ原は高山市から指定管理を受けても勝手にコースを作ることができない。
- ・小坂の滝は初心者コースでもきびしい。どういふものを初心者コースというのか考える必要がある。
- ・他業種、他団体とのネットワークづくりをしていきたい。

最後に(田村さんから)

- ・回転寿司でなく、にぎり寿司を！お客さんとのコミュニケーションを大切に。
- ・セブンイレブンは役員が弁当を食べ、品質管理を徹底して行っている。

5. 木育の実践例

講師:入江 鐵夫(行灯工房代表)

栗谷本 征二(栗くり工房代表)

小木曾 賢一(森林たくみ塾)

洒井 寛(洒井産業社長)、洒井 慶太郎(洒井産業専務)

参加者:4名

報告者:高屋 良平(エヌエスネット)

《報告》

最初はそれぞれの立場から「木育」に関わって立場から、その取り組みと思いをお話していただき、後半は、参加者が取り組みの一端を木工実習という形で体験する予定でしたが、講師5人の方の熱い思いがぶつかりあい、それぞれの真摯な取り組みがお互いに刺激しあって話がどんどん深くなっていく中、終了時間へなだれ込んでしまいました。

<木育実践者の思いと取り組み>

入江:未就学児を中心に木の観察や木のものづくりをとおして子どもの心を育む。「本物の」で子どもの感性を育てる。こどもは「本物」を見抜く目を持っている。また、地元も木を使うことが大切。

小木曾:教育旅行として中学校を中心に年間 1,000 人ほどを受け入れている。森のインタープリテーション、森の手入れとものづくりを行っている。クラフト(合板と紐をベースにしたフレーム作り)では、生徒がすばらしい発想(それを阻害してしまうのが大人である)を見せる。

栗谷本:園芸からこの世界に入ったこともあって、木を種からそれが育った木材までといったサイクルで考えている。また、木っ端を利用して作品を作る。身近なところから材料を得ることが大事だし、それによっていろいろな人とのつながりが出来る。

洒井 寛:どうしたら木が売れるようになるか、から始まって木のおもちゃを作るようになった。「食育」と結びつけて箸づくりを行っている。また、「童具」(木を使った遊具)の製作に力を入れている。もちろん、国産の材料(全国 130 の工場のネットワークから調達している)を使用している。

<スライドと実物見本>

小木曾:中学校の教育旅行のプロクラムの映像—枝打ち、間伐、木のクラフト(フレーム作り)など

栗谷本:木の実(種、瓶入り)、木の昆虫クラフト(標本箱入り!)、木の笛のかずかず(鼻笛も!)など

洒井:木材の切り出しの映像、木のおもちゃや遊具の実例映像など

箸づくりの治具(特許つき!)、木のスプーンづくりのキット

<木育実践者の工夫>

入江:幼児は「知識」が通用しない。五感で感じさせることが大切。子どもに目線を合わせることも大事だ。

栗谷本:木の楽器(笛)作りでは音で参加者の心をつかむことが出来る。また、このプログラムではコミュニケーション作りが出来ることが大きい。プログラムの継続性、シリーズ性、テーマ性を重視している。

小木曾:親子の体験活動が増えてきているが、親がネックになることもある。そういう場合は親への事前レクチャーも必要。

洒井 慶太郎:紙芝居(手作り!)は有効。

<木育実践者の共通した課題>

ものづくりのプログラムの中で数をこなすことと木育のねらいを実現することをどう両立させるか。

栗谷本:数をこなすケースと子どもの創造性を引き出すプログラムは別物。理想は 5 に程度の少人数。

小木曾:ねらいによって手法を変える。

洒井 慶太郎:(スプーン作りの例)いくつかの製作段階のキットを用意して対応している。

入江:安全管理上ナイフを使わず(学習指導要領では小学 4 年生まではナイフ使用禁止!)、サンドペーパーでの磨きだけというものもあるが、ナイフでスプーンのアールを出さなければ意味がない。

酒井 慶太郎:スクレーパーを使う手もある。

講師の方の実践のお話はお互いに触発されるところが多かったようで話はずきない感じでした。森の自然観察や木のものづくりに関わっているわれわれ素人から見ると驚くような発想や技ばかりでしたが、「本物の」木育の取り組みから得られるところがいっぱいありました。

参加者が少なかったのがもったいなかった。



★ 交流会



★ 2日目分科会

1. 面白い地学・火山灰観察

講師:熊崎 浩之(岐阜野尻湖友の会)

参加者:3名

報告者:石際 淳(エヌエスネット)



この集いでも前回から始まったばかりの新しい分野、地学に関する分科会に参加しました。テーマは「火山灰の観察」。地味～な分科会で、参加者は講師の熊崎さん含め4人。

熊崎さんは、飛騨小坂 200 滝などいろいろな活動に関わってみえる顔の広い方ですが、今回は岐阜野尻湖友の会という聞き慣れない肩書きで講師を務めていただきました。

まず、野尻湖友の会の説明から。長野県にある野尻湖ではナウマン象の化石発掘調査が1962年から始められ、現在では各地域に組織された野尻湖友の会が発掘調査の一般参加者の募集や事前の学習などを行っているということで、熊崎さんは岐阜野尻湖友の会の会員として、いろいろ勉強されているそうです。

- ・御嶽の火山活動の歴史。30万年前に形成され、3万年前に噴火。地球の歴史を1年に換算するとほんの大晦日のお昼以降の出来事。
- ・熔岩の流れた方向を地形図で確認→台地状になっている場所
- ・火山灰が流れた方向→偏西風の影響でほとんどが長野県側に飛散、堆積→濁河温泉付近には火山灰の堆積がない
- ・火山灰の組成と火山ガラスのでき方。火山ガラスとはマグマが発泡しながら急激に冷やされることでできるガラス状の細かい粒子のこと。
- ・2万5千年前の鹿児島島の始良(あいら)カルデラの大噴火では東北地方まで火山灰が飛散、堆積した。この火山灰層を調べれば上下の地層の年代が分かる。これを鍵層という。

説明の後、実際に火山灰の観察の方法を実習しました。前述のとおり、濁河周辺では火山灰が採集できないので、市販の鹿沼土で代用しました。

お椀に水を入れ鹿沼土を溶かします。最初は味噌汁みたいですが、黄色い粘土がなくなるまで何回も水を換えながら火山灰を洗います。最後に底に残った火山ガラスと輝石などの粒を紙の上に広げて乾かします。

透明なプラスチック容器に入れてルーペや顕微鏡で観察しました。白い粒が火山ガラス。でき方によって形が違うそうです。黒い粒が雲母や輝石。これらの分析でどの噴火でできた火山灰かを同定するらしい。

4人とも好きなペースで飽きるまで火山灰を観察し、まったりとした分科会は大満足のうちに終了しました。

3. 秋神温泉小林さんと森を歩こう

講師:小林 繁(秋神温泉旅館)

参加者:12名

報告者:庄司 正昭(ODSS エコツーリズム事業部)



《 報告 》

●御嶽の紹介

まずは、室内で小林さんの自己紹介と、御嶽の話をしていただきました。御嶽は1991年に小規模であるが噴火しているらしいです。周辺の植生や溶岩によって流れたところにできた森の話などを、実際にいろいろな興味深々なアイテムを多数持ってきていただきました。

予備知識を学び、いざ野外へ！

●山の仕事の大変さを知る

まずは、自分の背丈以上もある笹藪の前にやってきました。山の仕事をする人は、この笹藪の中をチェーンソーや道具などを担いで歩いているそうです。そこで、実際に参加者の方々と笹藪歩きをしてみました。

やってみると、意外と大変！前は見えず足場は悪く、ここを山道具を抱えて歩くのは大変な重労働だと思いました。これは貴重な体験でした。

●原生林を歩く

小林さんに、いろいろな木のおいを嗅がせていただきました。一番興味をひかれたのはミズメ。においがサロンパスの匂いで、参加者の方々はびっくりしていました。おやじギャグも飛び出し、皆さん和やかなムードに。

さていよいよ、原生林コースに歩いていきます。ところどころ小林さんがいろいろお話してくださいました。おもしろかったのがオオハンゴンソウという外来種。小林さんいわく、これは食べるとおいしいらしく、今実験段階で調理法などは企業秘密とのことでした(笑)

原生林コースでは、様々な針葉樹の森でこれほどの多様性がある針葉樹がたくさんある森は初体験でした。ここでも、小林さんから薬草の話や昔話など、沢山のお話をいただきました。

小林さんの語り口は、とても温かく私を含め参加者の皆さんもとてもリラックスされていたようです。とても印象的だったのは、「植物を採るときは『ありがとう』という気持ちでいただくこと。」といった小林さんの目はとても優しいものでした。本当に自然に感謝し自然と共存している方なんだと改めて思いました。気がつけばあっという間に時間となり、終了となりました。

参加者の皆さんもとても癒されて、笑顔の絶えないガイドツアーでした。

4. 御嶽から山問題を考える

講師:伊藤 栄一(森のなりわい研究所 代表)

参加者:6名

報告者:平工顕太郎(ODSS エコツーリズム事業部)



《 報告 》

今、森林整備活動で切られた木々は放置され、ごみのような扱いになっているそうです。私たちが誇れる日本の山は、本当にこのようなものであってよいのでしょうか。

「いい山」とは ～経済価値のある(お金になる)山がいい山といえるのかどうか～

林業関係者の中には、これまで経済林一辺倒で生きてこられた方もいらっしゃると思います。むしろ、山は経済的に成り立っていないと意味が無いとまで言われてきたのかもしれませんが。「経済」「生物」「環境」と、山の見方は様々です。では、何にといい山であることがよいのでしょうか。人間にとって、生物にとって、地球にとって・・・

私たちは、これまでの日本の林業が主としてきた経済林の時代から、新たな森のあり方を議論していかなければいけない場面に立たされているのではないのでしょうか。今からおよそ60～70年前は、人々が暮らしを支えるために里山林を利用していました。日本人が山を適度に利用していた時代は人と自然との間に理想的な調和が保たれ、持続的に山が元気でいられそして生物も多く棲息できていたと思われます。しかし、最近山に人の手が入らなくなりました。人の手が入らないということは、危険な森を生み出すことにも繋がる可能性が大いに考えられます。

「あとは野となれ山となれ」という日本の言葉は、実は贅沢な言葉なのかもしれません。雨量、気候、温度に恵まれ緑が豊かであることが当たり前、どんどん植物は茂って手入れができなくなるほど育つ、そのような国は世界の中でも珍しいと思います。これほど豊かな森林に恵まれた環境にしながら人々が山の中に入っていき文化、森に遊びに行く文化というのは非常に少ないと感じます。普段は山のすぐ脇で生活しているにもかかわらず、暮らしの中には山との接点がほとんどない気がしませんか。それに加えて、蛇や蜂を恐れるあまり、子どもにも山に入らないようにアナウンスする人々が最近では多く見受けられるようになりました。本当は森が荒れているのではなくて「人と森との関係」が荒れているのかもしれない。

今一度、皆で森の文化を見直したい。ただ、人間の動く時間の流れと森の生きる時間の流れとの間にはズレがあります。私たちの役目は、そのような森の時間と人間の時間とを繋ぎ合わせることなのかもしれません。そして、その活動が人々の生活に入り込めるようなものにしていきたいと思っています。

● 人と森との接点をつくり生活と結び付けるために

- ・燃料、エネルギーとしての活用の見直し
- ・ペレットストーブ等、住宅分野への提案
- ・林業の第三次産業化(農業は観光化されてきている)
- ・キャンプファイヤーの火はイベントであり生活に結びつかない(必要な火と不必要な火)

また、現代の人と自然との関係についての懸念材料は他にもあり、現代人の中には自然の音を心地よいと感じられない人もいます。

- ・川の流る音がうるさくて寝られないと言う人
- ・カエルがいっぱい鳴くと警察に通報する人
- ・畳の匂いがダメな人

この分科会のテーマは「山問題」という大きなものであり、何かひとつの答えを導き出すことはしませんでした。それ以上に、こうして参加者がそれぞれの視点から想いを発し、山について真剣に議論できたことこそが非常に大切なことだったと今は感じております。

5.ツリークライミング体験

講師:上田 康美(ツリークライミングクラブ橙 代表)

参加者:14名

報告者:加藤 裕章(ODSS エコツーリズム事業部)



《報告》

ツリークライミングジャパン公認インストラクターの上田さんに講師をしていただき、日和田高原でツリークライミングの体験会が行われました。今回の参加者は、ツリークライミングが初めての方ばかりで、小学生も2名参加されました。

スタッフの方々が2本の栗の木の幹にロープをかけていただき、参加者はヘルメットとハーネスをつけてから準備体操をしました。自分たちが木になって風に揺られたりするような体操をして、登る前から木と友達になる準備をしました。

登る前に上田さんから「木と友達になることが大切で、登る前にお祈りができない人は登れなかったりする」という心構えを教えていただき、木に触れて「登らせてください」とあいさつをします。続いて、木の幹から垂れたロープとハーネスをつなげて、手と足を使って登っていきます。途中で逆さになったり、宙ぶらりんになったり、思い思いに楽しんでいました。

参加者の方からは「木の上からの眺めがよくて気持ちよかった」、「思ったより力を使わずに登れた」などの感想が聞かれました。片腕のない障害を持った方や小学生の方も器用に登られ、ツリークライミングは子どもからお年寄り、障害者の方までいろんな方が楽しめるプログラムだなと感じました。

ツリークライミングを楽しんだ後、ロープを木の幹にかけ、ロープを結ぶセッティングのしかたを教えてくださいました。

ツリークライミングは今までに全国で15万人登って一度も事故はないそうで、上田さんの安全に対する気配りやプロ意識というものも学ばせていただきました。

★ 全体会

進行: 田村 明(朝日大学ビジネス企画学科教授)

場 所: 研修室

● エクスカーション、分科会発表

エクスカーション3つと分科会計9つのそれぞれの内容と成果を、エヌエスネットとODSSエコ事業部スタッフがまとめて発表した。

★ 閉会式

● 実行委員会長の挨拶 北川 健司(NPO 法人エヌエスネット)

2日間天気にも恵まれ、楽しい交流の時間を過ごすことができました。御岳は今も奥深い場所で、自然の魅力いっぱいの場所です。エクスカーションや分科会で御岳周辺の自然も満喫していただけたと思います。また、飛騨の名人の技も体験できました。

今回は、日程が合わず多くの実行委員の方が参加することができませんでした。日程については今後十分に調整して多くの方に参加いただけるよう調整しなければなりません。

さて、次回はいよいよ最後に残った岐阜市での開催を私は望んでいます。体験活動ぎふのポータルサイトも準備が進んでいます。もっと繋がり、岐阜の自然体験活動を活発にしていきましょう。

新聞記事

自然体験指導者が交流
下呂市で講演、分科会で研さん



「第6回川と山のきふ自然体験活動の集い」が7日、下呂市小坂町落合の奥御嶽少年自然の家周辺で開かれ、各地の自然体験活動の指導者が交流、研さんした。

自然体験活動の指導者らでつくる実行委員会が、指導者同士で交流することで知識を深めてもらおうと毎年県内各地で開催。今回は県内外から約70人が参加した。

基調講演として、同市萩原町で民宿を営み

落語公演の企画も行う尾藤政勇さんが、落語家の話し方について講演、自然体験指導者に必要な話術を紹介した。

続いて分科会に分散。実際に御嶽の森の中を歩き、専門家から植生についての説明を聞いた。御嶽の山小屋での活動の紹介、木工細工の指導に携わる指導者が一緒に木工実習をするなど、互いの活動内容を紹介し合った。8日にも行う。

(田島豪人)

御嶽の植生について説明があった分科会＝下呂市小坂町落合

11月8日付 中日新聞

25 岐阜総合 2009年(平成21年)11月8日

新知識を習得し交流
下呂 自然体験団体の集い

県内で自然体験活動に取り組む団体や指導者が交流する「川と山のきふ自然体験活動の集い」が7日、二日間、下呂市小坂町を伝えよう」とあいさす。参加者は、下呂市の民宿経営者で落語家の尾藤政勇さんから話術のコツを学んだ後、ガイドツアーの現状と課題を分科会で話し合った。

開会式では、実行委員長でNPO理事長の北川健司さんが「ネットワークをつくり、子どもたちに自然の豊かさ」を伝えた。

飛騨小坂の薄巡りなと周辺の自然についてのエクスカーション知識を得ながら交流をもち、参加者は御嶽へ深めた。(森村陽子)



開会式であいさつする北川健司実行委員長＝下呂市小坂町の県立御嶽少年自然の家で

11月8日付 岐阜新聞 岐阜総合版